
異文化に対する態度と英語習熟度

——コスモポリタニズム尺度を使用して——

森泉 哲*

Abstract

English as a Foreign Language (EFL) aims at not only improving learners' language skills but also raising their sensitivity toward other cultures in the globalizing world. The purpose of the current paper is to examine the relationship among junior college students' English proficiency level as measured by TOEIC, their motivation, and their attitudes toward other cultures measured on a cosmopolitanism scale. The results revealed that cosmopolitanism had a positive association with various aspects of motivation. However, the relationship between cosmopolitanism and English proficiency levels were not significant. These results suggested that positive attitudes toward other cultures were linked with positive attitudes toward learning English through positive self-images about learning and using English, but not actual English proficiency levels. Implications for EFL were discussed in terms of its purpose and content.

1. はじめに

外国語学習においては文法や語彙などの獲得だけではないことは、多くの

*本研究は、南山大学短期大学部英語教育共同研究（浅野享三, William Kumai, 伊藤聡子, Raj Susai 各氏）により収集したデータの一部を分析・考察したものである。執筆にあたって、Raj Susai 氏より貴重な助言を頂いた。ここに謝意を表する。

外国語学習者にとっては納得するところであろう。外国語学習を通して、結果として言葉から見えてくる文化や社会について理解することも、英語を学習する際の題材として、その文化や社会について、また文化の多様性について理解を深めることもできる。

言語と社会・文化の不可分の関係があるとする、英語学習によって、どのような社会的な知識や価値観を保持しようとするればよいのか、また自発的に学習者はそうしようとしているのであろうか。英語学習を動機づけの観点から研究している研究者は、この学習者のアイデンティティや価値観に関する問題を動機づけ研究の中に含めてきた。例えば Gardner and Lambert (1959) では、目標言語文化に自らを同化させたいという動機を「統合的動機づけ・志向性 (integrative motivation/orientation)」と概念化し、その高低の程度と英語習熟度との関連や、動機づけに関する諸概念との関連について一連の研究を行っている。しかし、Dörnyei (2005) や Yashima (2009) からそもそも統合的動機づけは現実的なものかという疑問が提出されているように、英語学習が目標言語文化に同化という概念が現実にもふさわしいのかという問題も存在する。

特に日本人学生の多くは大学入学前に中学校・高等学校で教科として英語学習を行ってきた。日本での英語教育の目標は、英語圏のみの文化的同化を目指した教育ではない。文部科学省から出版されている中学校学習指導要領解説 (2008) を例にとると、教材選定の観点として、「英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」こととして、英語圏の文化を中心としながらも、英語以外の言語を話す人々の文化や自国の文化についても取り上げるように明示的に促している。このことから、英語教育によって、結果として英語圏のみの文化を理解しようとする態度を養成するものではないことは明白である。

これらの議論と軌を一として、大学教育においては、文部科学省のグローバル人材推進事業のように、語学力をも生かして、多様な価値観を乗り越えて、交渉・問題解決を行うような人材の育成が最近特に目指されている。特に、本事業では「異文化に対する理解と自文化に対するアイデンティティ」が求められているという（文部科学省、『グローバル人材推進事業公募概要』）。学生全員が、グローバルで活躍できる語学力や人材になるというのは極論だとしても、自文化や異文化と共存共栄を目指す地球規模的な価値観やアイデンティティを育み、共有することは言語教育においても、いや外国語教育だからこそ、目指される教育目標であるのかもしれない。

そこで、本稿では盲目的に目標言語が使用される文化への統合を目指すという統合的動機づけから一步出て、グローバル化時代に必要となるとと思われる異文化に対する態度、ひいては地球規模的な協調性を志向した価値観（コスモポリタニズム）と英語学習動機づけの概念との関連、ならびに異文化に対する態度と英語習熟度との関連について南山大学短期大学部学生より得られたデータを使用して検討する。

2. 国際的志向性とコスモポリタニズム

統合的動機づけに代表されるような英語母語話者やその文化の理解やその文化の価値観を獲得することだけが、英語学習の目的ではないだろう。むしろ、今日英語が事実上国際共通語になっているという指摘からも、英語学習が世界の様々な文化や人々の暮らしや価値観に目をむける機会となると考える方が自然かもしれない。この概念を Yashima (2009) は国際的志向性 (International posture) としている。国際的志向性とは「特定の L2 集団ではなく、国際社会につながろうとする態度である」(p. 145) と述べ、日本のような英語を外国語として学習しているという English as a Foreign Language (EFL) 環境においては、むしろ適切な価値観であるとする。グローバルに活躍できる

人材の育成が急務といいながらも、生徒・学生にとっては、教科の一つとして、試験でよい成績をとるため、受験に必要なからという目的のみで英語学習をしている場合も多いからである。受験を前提にした学習では、世界に視野を広げるところか、文化や多文化集団に対する想像性はおそらく働かないであろう。

国際的志向性には、操作概念として、(1)他集団に対する接近的態度、(2)国際的な職業や活動に関する関心、(3)外国事情に関する関心があるとする。さらには、(4)世界の人々に伝えようとする自分の考えを持っている、という概念が含まれると指摘している(Yashima, 2009)。Yashima (2009) は、自身の過去の研究を紹介しつつ、動機づけ諸概念と国際的志向性との関連について、実証研究による結果を報告している。具体的には、国際的志向性は、学習者の動機づけとコミュニケーションしようとする積極的な態度(Willingness to Communication, WTC) と正の相関があり、国際的志向性が、英語学習の動機づけや実際のコミュニケーションの機会を見つけるなどの積極的な行動を引き起こす規定因になっているという結果である。

動機づけと国際的志向性との関連について、さらに Yashima (2009) では、国際的志向性と自己決定理論(Deci & Ryan, 1985)を援用した L2 学習の動機づけ(Noels, 2000, 2003)との関連を検討し、英語動機づけを高めるには国際的志向性は重要な価値観であると指摘している。自己決定理論では、大きく分けて外発的動機づけと内発的動機づけに区分されているが(桜井, 2009)、国際的志向性は、外発的動機づけ(外的調整)とは負の相関関係を示し、内発的動機づけとは正の相関を示している。また理想自己とも中程度の正の相関を示したことを見出している。つまり、外圧によってやらされている学習は、国際的志向性を低減させてしまうが、学習の動機をより自発的に意味づけることによって、英語学習を単なる文法やことばの学習という捉え方ではなく、世界とのつながりがあることによって、むしろ英語学習の動機づけも高まるという可能性を示唆している。

国際的志向性と動機づけとの正の関連がある理由として、「可能自己」の観点から Yashima (2009) は以下のように説明している。国際的志向性によって、英語を使っている自分が可視化でき、英語を使用して世界とつながっている自分を可能自己としてイメージできるからではないかということである。これに関連して、Yashima (2009, p. 148) では、Lave and Wenger (1991) を援用して、「想像の国際社会 (imagined international community)」という概念が日本のような EFL 環境での英語学習には英語学習継続の動機づけにつながるのではないかと提案している。想像の国際社会とは、学習者一人一人が想像を働かせて、実際の英語学習は、国際社会とつながっているのだという認識を得る行為であると述べ、日本では実際の国際社会がビジュアル化できないので、それが可視化できるような教育的援助が必要であるとも述べている。その一事例として、モデル国連の活動を通して、日本人の高校生が英語習熟度だけではなく、国際的志向性も高まった事例を紹介している。

国際的志向性の概念を見ると、尺度項目には「外国人と友人になりたい」「外国で働きたい」「外国に関するニュースを聞く」「環境や南北間格差などの国際問題について意見がある」が含まれ、世界に視野を持つことが含まれていることがわかるが、ただ単に外国についてもっと勉強したいというような憧れの意識のようにも思える。年齢対象の問題もおそらくあるだろうが、異文化コミュニケーションを志向した英語教育では、ただ単に外国に興味・関心があるだけではなく、その解決困難な問題の解決に向けた方策を検討することや他者に対して共感することも必要になるであろう。そこでは、グローバル化の時代に、自己と他者の存在の価値、ひいては地球上に住む人々の暮らしが共存できるような志向性を意識していくことも必要であると思われる。これは、コスモポリタニズムという概念から語られてきており、国際的志向性だけでなく、コスモポリタニズムに関する概念も外国語教育で検討する価値があると思われる。

コスモポリタニズムについては、従来より政治思想、政治哲学や異文化

コミュニケーション学などの分野で議論され（例えば、ハーヴェイ、2013；伊藤、2010；小林・菊池、2012；松元、2007；Sobré-Denton & Bardhan, 2013）、様々な定義やパラダイムが存在し、定義や歴史的変遷をみるだけでも、その議論は尽きない。しかし、コスモポリタニズムは「グローバルな規模で既存の境界線にこだわらず、多様性を尊重しあう態度を共有している思想」（伊藤、2010、p. 236）であるというおおざっぱな定義にはあまり反対を示す人はいないかもしれない。本稿では、定義やパラダイムの細部に関する議論には深入りせずに、社会心理学的アプローチによって既に日本で作成された尺度を使用することを前提として、議論を進めたいと考える。

コスモポリタニズム尺度を作成した試みとして岩田（1989）がある。岩田は、コスモポリタニズムの辞書的定義を採用して、「一般に、国家相互の協調を本位とし、世界平和を目的とする立場の総称」と広辞苑の定義を引用している。操作定義として、4つの下位概念を仮定し、因子分析によって、「反自民族優秀性意識」「異文化体験指向」「地球運命共同体意識」「国家不要意識」という4下位概念を見出している。反自民族優秀性意識とは、自民族の考えが世界の中心であり、多民族・文化を一段劣ったものとする自民族中心主義とは反対の意識であり、日本人の優秀性に関する項目を反転させる形で得点化したものである。異文化体験指向とは、外国の文化や生活に触れたいという価値観であり、項目的には、Yashima（2009）の国際的志向性と類似した概念と思われる。地球運命共同体意識とは、経済的に貧しい国を豊かな国が助けるべきであるという国際援助の視点や文化の平等性に関する項目からなっており、地球全体として相互理解や平等的な価値観を指向した意識である。国家不要意識とは、国際協調の際に、国家の存在がむしろ障壁になっているのではないかとする国家の存在に対する否定的な態度である。これらの4下位尺度を合算したコスモポリタニズムと、異文化接触や外国語学習との関連を検討した結果、コスモポリタンの意識と自発的な外国語学習の有無および海外を扱ったテレビ番組の視聴時間との関連が見られたと岩田

(1989) は報告している。具体的には、コスモポリタンの価値観をより保持すると、外国語学習もより盛んに行い、海外を扱った番組をより視聴するという結果であった。

これらのことから、本稿ではコスモポリタニズムと英語学習習熟度ならびに英語学習の動機づけの概念には以下のように予測する。岩田 (1989) ではすでに外国語学習とコスモポリタニズムの正の相関が見出されていることから、本学の学生においても、英語学習動機づけとコスモポリタニズムには正の相関がみられるのではないかと予想する。またコスモポリタニズムは、国際的志向性 (Yashima, 2009) と類似した概念と考えられるため、Yashima (2009) で見出されたように、理想自己や統合的な動機づけとは正の関連がみられるであろう。さらにコスモポリタニズム的な考えが強い学習者は、英語習熟度も高いのではないかと予測する。

3. 方法

調査参加者 2012 年 11 月に TOEIC を受験した本学短期大学部学生のうち、アンケートに回答し、さらに本調査用にデータを使用しても良いと承諾した学生を対象とした。最終的には 240 名が対象である。

手続き 本調査にあたっては事前に「南山大学『人を対象とする研究』倫理審査」を研究審査委員会に申請し、承諾を得た。本調査にあたっては、2012 年 11 月の TOEIC-IP 受験前に調査参加者に質問紙を配布し、回答を求めた。質問紙は合計 6 ページからなり、本研究と関連のある自己概念や動機づけに関する項目のほか、学習方略等、人口統計学的な質問および海外経験の有無について回答を求める質問項目から構成されていた。調査実施時間は 25 分程度であった。

調査項目

コスモポリタニズム 岩田（1989）が作成したコスモポリタニズム尺度を使用した。19項目からなる尺度である。5件法（1—まったくそう思わない、5—とてもそう思う）で回答を求めた。1989年当時とは、日本の経済状態が異なっており、2項目の文言を修正して使用した。具体的には、反自民族優秀性意識にする項目において、「日本の大幅な貿易黒字は優れた技術と努力の結果なので仕方ない」という項目があったが、それを「日本が、世界的にみて経済が豊かであるということは優れた技術と努力の結果なので仕方ない」と改め、また「わが国の大幅な貿易黒字は日本人の優秀さを証明している」という文言を、「世界的に見て日本が経済的に豊かであることは、日本人の優秀さを証明している」と改めて使用した。

そのほかの項目は、岩田（1989）の表現をそのまま使用した。具体的には、反自民族優秀性意識の項目は上記2項目の他合計6項目からなり、「日本民族は世界的に見ても優れている」「わが国はいろいろな分野で世界をリードすべきである」等である。上記の項目のように、自民族中心主義的な反応であればあるほど、点数が高くなってしまうので、反自民族優秀性意識を測定する際には、逆転項目扱いとし、点数が高くなるにつれて、世界の文化は平等であるとする、反自民族優秀性意識の価値観が高くなるように、計算し直した。異文化体験指向は4項目からなり、「外国の生活や文化に触れると感動する」「できるだけ多くの違った国々に住んでみたい」等である。地球運命共同体意識は5項目から構成されており、「将来に備えていくら努力をしても一国だけでは生き残れない」「裕福な国はかなり犠牲を払っても貧しい国を援助すべきである」「地球上の国々は運命共同体である」等である。国家不要論は4項目からなっており、「人の往来と情報のやりとりがますます頻繁になる将来は国家の壁はないほうがよい」「国家の壁が紛争や戦争の原因になっている」「自由な経済活動の妨げになるので国家の壁はないほうがよい」等である。

本論文では、コスモポリタニズム尺度の妥当性について検討する目的ではないため、確認的因子分析を施さず、岩田（1989）の概念をそのまま使用した。内的一貫性は、反自民族優秀性意識（ $\alpha=.79$ ）、異文化体験指向（ $\alpha=.71$ ）、地球運命共同体意識（ $\alpha=.56$ ）、国家不要意識（ $\alpha=.74$ ）であり、地球運命共同体意識以外の下位尺度は問題とならなかった。地球運命共同体意識については、本論文ではこのまま使用せざるを得ないが、信頼性が低い場合、結果も参考程度にとどめるべきであろう。

動機づけに関連する項目 Taguchi *et al.*（2009）の項目のうち、日本人学生を対象とした項目をそのまま利用した。本研究の目的は構成概念の妥当性を検討することではないため、Taguchi *et al.* の概念及び項目をそのまま使用することとし、内的一貫性（クロンバック α 係数）のみ示すこととする。すべての項目において 6 件法（1—まったくそう思わない, 6—とてもそう思う）で測定された。本尺度は具体的には 10 要因の尺度からなっているが、本稿に関連する以下の 7 要因のみを取り上げる。

- (1) 英語学習継続への意図—本項目は、Taguchi *et al.*（2009）では、動機づけの強さを測る測定基準値（*criterion measure*）として従属変数として使用され、4 項目から構成されている（ $\alpha=.79$ ）。
- (2) 理想 L2 自己—L2 学習に関する理想的自己概念を尋ねた 5 項目からなる（ $\alpha=.85$ ）。
- (3) 義務 L2 自己—L2 学習に否定的な結果を得ないために持つ、義務や責任に関する自己の信念について、4 項目から構成されている（ $\alpha=.76$ ）。
- (4) 道具的動機づけ（促進）—将来の自己目標（経済的利益および就職）達成のための手段として、英語学習の必要性の程度を尋ねた 5 項目から構成されている（ $\alpha=.81$ ）。
- (5) 道具的動機づけ（予防）—好ましくない状況を回避する手段として義務的に英語学習する（例 卒業要件になっている）程度を尋ねたもので、

5 項目から構成されている ($\alpha=.78$)。

- (6) L2 文化への関心—英語が使用される文化の文化的産物 (例 TV, 音楽, 映画) に対する関心を 4 項目で尋ねた尺度からなる ($\alpha=.71$)。
- (7) 統合的動機づけ—L2 や L2 を話す人々や文化に対する肯定的な態度を尋ねた 3 項目からなる ($\alpha=.68$)。

TOEIC の得点 TOEIC は大きく分けてリーディング・セクションとリスニング・セクションに分かれており, それぞれのセクションで 0–495 点の幅で得点が示され, 合計得点として二つのセクションを合わせた得点が 0–990 点の幅で示される。本研究の分析にあたっては, 2 セクションの合算した合計得点を使用した。

4. 結果

各概念の相関関係分析

それぞれの動機づけ諸概念, コスモポリタニズム下位尺度, 英語習熟度との相関関係は表 1 に示すとおりである。それぞれの概念の関係について, (1) コスモポリタニズムと下位尺度との関連, (2) コスモポリタニズムと英語習熟度, (3) コスモポリタニズムと動機づけ諸概念との観点から結果を以下に報告する。

まずコスモポリタニズム全体得点と下位尺度 (反自民族優秀性意識, 異文化体験指向, 地球運命共同体意識, 国家不要意識) との相関関係について検討する。コスモポリタニズム全体得点は, 19 項目 (一部反転項目を含む) をすべて加算し, 項目数で除した平均値を使用した¹が, すべての下位尺度と中程度以上の正の相関を示していた。このことは, 岩田 (1989) のコスモポリタニズム尺度の妥当性ならびに理論的予測と一致した結果を示している。換言すると, 国際協調主義をあらわすコスモポリタニズムという概念は,

表 1 各変数の相関関係

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	M	SD
1. 学習継続意図													3.93	0.98
2. 理想12自己	.67**												3.64	1.12
3. 義務12自己	.31**	.33**											3.09	1.10
4. 道具的動機 (促進)	.62**	.69**	.41**										4.37	0.98
5. 道具的動機 (予防)	.19**	.21**	.54**	.40**									4.01	0.91
6. 文化的関心	.50**	.53**	.18**	.40**	.04								4.75	1.11
7. 統合的動機付け	.64**	.61**	.23**	.56**	.16**	.62**							4.84	0.90
8. コスモポリタニズム	.21**	.16**	.06	.18**	.04	.28**	.28**						3.41	0.35
9. 反自民族優劣性意識	-.28**	-.33**	-.24**	-.32**	-.18**	-.19**	-.34**	.34**					3.48	0.67
10. 異文化体験指向	.44**	.45**	.16**	.40**	.11†	.44**	.53**	.65**	-.24**				4.25	0.67
11. 地球運命共同体意識	.32**	.36**	.09	.31**	.09	.26**	.39**	.60**	-.31**	.58**			4.02	0.53
12. 国家不要論	.15**	.04	.20**	.18**	.13*	.13*	.21**	.57**	-.19**	.23**	.27**		3.17	0.73
13. TOEIC得点	.25**	.31**	.00	.17**	.00	.20**	.15**	.08	.06	.07	.04	.01	478.95	147.76

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

自民族のみが優秀であるという自民族中心主義とは反対の概念であり、異文化体験を積極的に行おうとする態度と関連があるということである。さらには一国家の問題ではなく、地球全体として問題を考えていかななくてはならないという地球共同態度意識を持ち、国家によって戦争や対立を助長していることから国家の存在に対して否定的な意識を持つことと関連しているということでもある。一方で、下位尺度間の相関を見ると、異文化体験指向、地球運命共同体意識、国家不要意識間では、正の相関が示されているが、反自民族優秀性意識とは、上記下位 3 概念は負の相関を示しているという結果である。これは、換言すると、反自民族優秀性意識が高ければ高いほど（自民族中心主義意識が低ければ低いほど）、異文化体験指向、地球運命共同体意識、国家不要意識に対する意識は低くなるという予測とは異なる結果であった。

第 2 に、コスモポリタニズムと英語習熟度についての相関関係に関して、両者は無相関という結果であった。コスモポリタニズムの下位尺度とも英語習熟度は関連がみられなかった。換言すると、コスモポリタニズムの高低には、英語習熟度は影響はなく、コスモポリタンとしての意識が高い者でも、英語習熟度は低い者もあり、逆に英語習熟度が高い者でも、コスモポリタニ的な意識を高く持っているとは限らないということを示している。

第 3 の分析の観点であるコスモポリタニズムと動機づけ諸概念との相関関係に関しては以下のとおりであった。まず、コスモポリタニズム全体得点は、学習継続意図、理想 L2 自己、道具的動機（促進）、文化的関心、統合的動機づけと弱から中程度の正の相関があり、国際協調性と英語学習への積極的な動機づけ、文化的関心と正の関連があることが判明した。一方、義務的に動機づけられている場合は、コスモポリタニズムと無相関であった。コスモポリタニズム下位尺度と動機づけ諸概念との相関については、異文化体験指向および地球運命共同体意識と動機づけとの関連は、ほぼ類似した結果であり、コスモポリタニズム合算得点と同様、学習継続意図、理想 L2 自己、道具的動機（促進）、文化的関心と正の相関がみられた。国家不要意識

は、それぞれの動機づけ概念に正の相関はあるが、程度は弱い。反自民族優秀性意識のみ、動機づけ諸概念と負の相関関係がみられ、自文化の優越性を感じない意識をとればとるほど、学習継続意図、理想 L2 自己、義務 L2 自己、道具的動機づけ、文化的関心、統合的動機づけも低いという予測に反する結果となった。

以上の結果から、コスモポリタニズムは動機づけ諸概念と正の相関がみられ、下位尺度においても、動機づけには相関がみられるが、理論的予測とは反する結果や、英語習熟度とコスモポリタニズムには相関がないことが明らかとなった。

5. 考察

それぞれの動機づけ諸概念、コスモポリタニズム下位尺度、英語習熟度との相関関係について検討した結果、コスモポリタニズムと下位尺度との関連では、すべての下位尺度と全体得点では正の相関があるものの、反自民族優秀性意識と他の下位尺度では負の相関がみられ、概念の再考を要する結果となった。また、コスモポリタニズムは直接英語習熟度には影響はないが、動機づけ諸概念である理想自己、道具的動機づけ（促進）、文化的関心、統合的動機づけと正の相関がみられ、国際的な価値観の保持と英語学習の動機づけと正の関連があることが見出された。そこで、特に検討が必要であると思われる 2 点について以下に考察を加えたい。1 点目は、反人民族優秀性意識と他の概念との関連に関して、2 点目にコスモポリタニズム、動機づけ、英語習熟度の総合的な関係に関して述べたい。

反自民族優秀性意識はコスモポリタニズム全体得点としては正の相関をもちつつも、コスモポリタニズム下位尺度や英語学習動機とは負の相関であり、岩田（1989）が当初示したコスモポリタニズムの概念に対して一致した結果が見られるものの、構成概念の名称または概念自体を再考する必要がある。

あるだろう。岩田（1989）は、日本人や日本の経済的な豊かさからの優秀さに関する項目を作成し、因子分析の結果、これらの項目から構成された概念を自民族優秀性意識と命名している。ただ、コスモポリタニズムの価値観とは、むしろ自文化中心主義的な価値観は阻害要因になるとして、反自民族優秀性意識という名称をつけ、尺度計算の際に得点を反転させる逆転項目として採用した。しかし、本研究結果では他の下位尺度との負の関連が見出されたことを見ると、自国や自文化の優秀性を認めることは、国際協調的な価値観を保持することとなら相対する価値観ではなく、自国の優秀性があったとしても、自動的に他文化を排斥したり、他文化を軽蔑視したりするような見方にはつながらないことを示唆した結果になっていると思われる。むしろ、国際協調的な価値観では自文化に対して尊重しつつも、他文化に対して理解するという共存共栄的な価値観が望まれるのであろうし、また人々もそのように認識している可能性がある。

自他文化を尊重するという教育は現代では重視されているように思われる。例えば、文部科学省のグローバル人材育成事業において「異文化に対する理解と自文化に対するアイデンティティ」が強調され、また学習指導要領にも自国や他国の文化題材を扱うように指導がある。自文化の優秀性やアイデンティティを認めつつ、他者や他文化に対して理解し、尊重するという考え方が浸透している結果なのかもしれない。今回の質問紙調査の結果から、英語学習に関する動機づけと反自民族優秀性意識は負の相関を示したことをみると、現在の英語を学ぶ動機として、日本文化の発信という側面と他文化の理解という両面から教育が行われ、また学習者もそのような意識をもって英語学習を行っている可能性があるだろう。ただ、岩田（1989）が指摘するように、自国のみの優秀性をことさらに強調してしまうと、それは自民族中心主義に陥る可能性も考えられよう。常に、自他文化をバランスよく見る複眼的な思考が必要になってくるところは強調しなくてはならないだろう。本研究を通して、20数年前に行われた岩田（1989）の研究結果とは、異なった

見方がなされたということは、日本に対するその時点での調査参加者である大学生の見方が変容してきていることを表し、国や世界に対する考え方の変化がうかがえる結果なのかもしれない。まとめると、英語学習の動機づけやコスモポリタニズム下位尺度と反自民族優秀性意識は負の相関がみられたことから、自民族優秀性意識をもつことは、むしろ英語学習の動機づけや国際協調的な意識を高めることにつながるが、コスモポリタニズム全体として考えた場合、過度の自民族優秀性意識を強調することは、コスモポリタニズムの思想に反するということになるだろう。

コスモポリタニズム、動機づけ、英語習熟度の関係をどのようにとらえたらいだろうか。コスモポリタニズムのどの下位概念とも英語習熟度とは関連が見られなかったが、コスモポリタニズムと英語学習動機づけの関係では道具的動機づけ、統合的動機づけとの正の相関がみられた。このことから、一つの可能性として、コスモポリタニズムのような価値観は直接外国語スキルには役には立たないが、外国語学習を勉強する動機としては有用であり、コスモポリタニズムを促進するような教育は、外国語学習だけでなく、むしろ一教科という枠組みを超えて、カリキュラム全体を通して行っていくものではないかということである。本研究では、コスモポリタニズム、動機づけ、英語習熟度がどのように関係しているのかの因果モデルまでは提示できないが、一つの仮説として、国際協調的な価値観を保持することによって、自文化に理解を示し、国との関係や世界を考えるきっかけとなる。それが、世界や他文化を理解する手段として外国語コミュニケーション能力を身につけたい、英語学習を継続して行いたいという動機づけにつながり、英語習熟度を高めていくというプロセスになるのではないかと考えられる。この一仮説は、Yashima (2009) の国際的志向性が、英語学習動機を高めたという結果とほぼ一致する。今後さらに研究を進めて、英語学習として単なる言語スキルの習得という点だけでなく、価値観と言語教育をどう考えていくのか、その実態とそのあるべき方向性を検討していく必要があるだろう。

6. 英語教育への示唆

本研究の結果から、反自民族優秀性意識、異文化体験指向、地球運命共同体意識、国家不要意識からなると便宜的に定義したコスモポリタニズムという概念を保持することは、直接英語習熟度には影響をもたらさないが、多文化に対する関心を高め、英語学習を継続的に行うという動機づけを高めることに寄与するのではないかと考えられる。このことから、本学ですでに実施している教育や今後の教育にどのような示唆が可能かについて、本セクションでは、提案を行う。

まず直接英語教育との関連について、英語学習の目的は、英語スキルの習得だけではなく、グローバル社会で活躍できる力を程度の差こそあれ、養成することであるとした場合、読解題材、ディスカッションの題材など内容にかかわる部分で、コスモポリタニ的な価値観を考えるきっかけとなる題材を扱うことができよう。日常生活で機能的にふるまうための日常場面に根差した場面や題材もあってなら問題ないが、特にリーディングの授業やディスカッションの授業等で、積極的に学生の視野を世界に広げるような題材を選び、自己と世界に関係をもたせ、これからの社会でどう生きていくべきか自分を見つめ直し、どう他者に働きかけたらいいのかを考えさせるきっかけを提供することができよう。

特に英語圏と非英語圏の題材に関するバランスや内容について量・質ともに配慮される必要がある。英語教育の中での「外国」とは無意識的にも意識的にも、英語が母国語として使用される欧米中心になりがちで、第2言語として使用されているケニア、インド等はどれだけ意識されているのか、また英語圏にはあまり登場しない中東やアフリカ、中南米の国々の文化、歴史、社会についてあえて意識させる必要もあるであろう。英語教育を通して、異文化理解や多文化共生を目指そうとしても、それが結局一部の外国人には憧れを持って関係を発展しようとするが、ある文化の人とは軽蔑しないにシ

ろ、距離をおき、存在しない人のように関係を持ちたがらないとするならば、それは問題視されるべきである。同様に、英語教育だからこそ、英語使用の権力構造についても気づきを促すような教育が必要であろう。国際共通語として利便性がある一方で、大言語によって文化や言語の多様性が画一化してしまっていることに対して、学習者に気づきを促すことは言語教育であるからこそ、必要な視点である。

7. まとめと今後の展望

本稿では、社会心理学領域で作成された既存のコスモポリタニズム尺度を使用して、本学学生の英語学習の動機づけと英語習熟度に関して検討した。その結果、コスモポリタニズム的な価値観は、英語習熟度に直接影響をもたらさないが、英語学習動機づけを高める可能性が示唆された。今後は、何のための英語学習なのかという英語教育目的論と関連して、グローバル社会を生きていくうえでの価値観との関連について検討が必要であろう。本稿では、コスモポリタニズムについての概念の妥当性には検討せずに、既存の尺度を使用した。コスモポリタニズムという概念自体、様々な解釈・思想があり、より深い議論が必要である。例えば、国家不要論という概念一つ取り上げただけでも、国家不要、必要という2元論では簡単に解決できない問題である。また、グローバル社会の様相はダイナミックなものであるために、ある時点の価値観は切り取ることが可能であったとしても、尺度化したことによって、見過ごされてしまう価値は存在するはずであろう。クリティカルな視点からのコスモポリタニズム (Sobré-Denton & Bardhan, 2013) では他者との対話 (dialogue) と再帰性 (reflexivity) が強調されており、そのような実践も積み重ねていく必要があろう。それと同時に、現代社会がより国際協調を志向し、共存共栄し、自他ともに豊かな暮らしができるように将来のより良い社会構築を目指した研究も必要であろう。今後は、より平和な国際社会を構築する

ためには私たち一人一人の市民がどのように参加したらよいか、どのように関わっていけるのかを考慮した研究や実践を外国語教育等でもさらに進めていくことが期待されているのではないだろうか。

参考文献

- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Gardner, R. C. & Lambert, W. E. (1959). Motivational variables in second language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266–272.
- Harvey, D. (2009). Cosmopolitanism and the geographies of freedom. Columbia University Press. 大屋定晴・森田成也・中村好孝・岩崎明子（訳）（2013）『コスモポリタニズム—自由と変革の地理学』
- 伊藤恭彦（2010）.『貧困の放置は罪なのか—グローバルな正義とコスモポリタニズム』人文書院
- 岩田紀（1989）.「コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討」.『社会心理学研究』, 4, 54–63.
- 小林正弥・菊池理夫（2012）.『コミュニティアニズムのフロンティア』勁草書房
- 松元雅和（2007）.『リベラルな多文化主義』慶應義塾大学出版会
- 文部科学省（2008）.「中学校学習指導要領解説外国語編」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf
- 文部科学省（2012）.「平成 24 年度グローバル人材育成推進事業の公募について」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm
- 桜井茂男（2009）.『自ら学ぶ意欲の心理学』.有斐閣
- Sobré-Denton, M. S., & Bardhan, N. (2013). *Cultivating cosmopolitanism for intercultural communication: Communicating as a global citizen*. New York: Routledge.
- Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese,

- Chinese and Iranian learners of English: A comparative study. In S. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 66-97). Bristol: Multilingual Matters.
- Yashima, T. (2009) International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Dörnyei, Z. and Ushioda, E. (eds.) *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 144-163). Clevedon, UK: Multilingual Matters.